

まえがき——廃墟に棲む人のために

すべては無駄であった。

こう書くと『我が闘争』めいて物騒だが、しかし試みが灰燼かいじんに帰したことは否定しようがない。東アジアで共有できる歴史観を持つという、ポスト冷戦期に多くの学者たちが模索した理想は、敗れたのである。

そんな夢がそもそもあったのかと、おそらくいまの若い人びとは問うだろう。しかし政府による公的な事業にかぎっても、二〇〇二年からの日韓歴史共同研究、〇六年からは日中歴史共同研究があり〔波多野二〇一一…第九章〕、大学や民間で自発的に取りくまれた「東アジア」を冠するプロジェクトは数え切れない。

二十一世紀の初頭に人文系のアカデミズムに接した人であれば、あの浮き足立ったようなブームを覚えておられるかと思う。日韓・日中交流といえど自明のものとしてその価値が通用し、学生を相互に留学させる予算がおりて、じっさいに「意識の高い」面々が応募

する。中韓の大学に勤める学者をパネリストに招けば、それだけで研究会やシンポジウムに箔が付き、狭義の学術研究をこえた「アクチュアル」な実践として自讃できる。そうした雰囲気のことである。

一九九七年に発足した「新しい歴史教科書をつくる会」のナシヨナリスティックな教科書は、二〇〇一年四月に検定を通過し、同月に発足した小泉純一郎政権は〇六年にいたるまで、「毎年」の首相の靖国神社参拝によって外交関係を揺るがした。しかしこの時代には眼前に歴史観の衝突があればこそ、かえってそれを克服する試みが称揚されるという弁証法が作動しており、けつして現実は「理想」をかき消すようには作用していなかった。小泉、およびその後継だった安倍晋三（第一次内閣）の政権が、先述のとおり政府の支援で歴史対話を進めた史実じたいが、それを物語る。

一九九三年に発足した欧州連合（EU）が九九年に共通通貨（ユーロ）を導入するなど、リージョナリズムの実験が世界的に注目されるなかで、東アジアや北東アジアを単位とした地域共同体の可能性を論ずるのもまた、当時の学識者の流行となっていた。古めかしい「東亜」の語を冠した学術書が一流の研究者の手で刊行され（※大沼編二〇〇〇、原二〇〇二）、性急な地域統合の構想はかえって戦前の亡霊の再来をもたらすといった、いま思えばずいぶん壮大な杞憂が語られることすらあった（米谷二〇〇六…一八八）。

わずか二十年、いや十年前においてすら、そうした空気は学界や論壇に充溢しており、国境を越えて共有可能な歴史のストーリーを描くという挑戦が、多様な人びとの手で試みられていた。——しかし、それらはいつたい、なにを残したのだろうか？

* * *

本書からちょうどほぼ十年前、二〇〇九年の十二月に刊行した博士論文（提出は〇七年の七月）で、私は以下のように記したことがある。

今日の同地域に生きる歴史研究者が、日本人は日本人にとって有利なように、中国人は中国人として耳に心地よいように、「台湾出兵」と「琉球処分」についてそれぞれ別個に独自の歴史観を信奉し続ければよいと唱えるだろうか。唱えた場合に支持を受けるだろうか。これに即座にイエスと答えられない人がいるということは、やはりこの地域でも西洋近代がもたらしたものを、一概には捨て去ってしまえないということとを意味している。

〔與那覇二〇〇九・六四〕

もはや多くの国民は「即座にイエスと」答えるであろう。そして私自身、いまはもうそ

れを咎めようとは思わない。

歴史観の統一や同一化が、国境を越えてなされることは起きえないし、その必要もない。否、国内にかぎったとしても、妙に本気で「共通の歴史解釈」を国民に刷りこもうとする面妖な為政者が出てくるよりは、たんに歴史が放置され朽ちてゆくのを眺めている方がましである。

上記の文章を江湖に問うたところ、私が勤めていた大学で行っていた日本通史の講義は、まず二〇一一年に日本語の単行本となり（與那覇二〇一四）、一三年の五月には広西師範大学出版社より中国語版が、同年七月に Paperoad Publishing から韓国語版が刊行された。地方大学のひとつの授業としては、それなりに野心的な挑戦ではあったと思う。もつともそれによって私が得たものは、きわめて少なかった。

日本語版はむろんのこと、中韓二か国語版のテキストも、見本が届きしだい大学の図書館に配架をお願いした。当時、中国・韓国からの留学生は日本の地方の無名大学にもつねに一定数いたので、彼らの勉強が過度の負担にならないよう、母語でも読めるかたちで教科書を提供して授業を開くのは、私のささやかな夢であった。しかしそうした構想を、実現する機会は来なかった。

いま思えばこの国の国力の低下につれて、欧米ではなく日本を留学先に選ぶアジア出身

者のレベルも下がっていくのは、自然な流れであった。学内では授業の進行に問題を来す例も生じ、学外では大学出版会から刊行された博士論文が盗用^{だうよう}だったという事件まで起きたのをみて、私は当時から留学生について「量ではなく質の確保を」と警鐘を鳴らしていたが、学科の同僚で耳を貸す者は文字どおりゼロであった。中韓の学生を出席させれば、ナシヨナリズムに抗して「歴史対話」を実践しているといった自慰的な神話に耽溺し、年々ハードルを下げては適性のない学生を入学させていた〔與那覇二〇一八b・一〇一〕。

学習意欲に乏しく、日本語では日常会話もあやしいそうした留学生に「私の授業は母語でも教科書が読めます」などと売り込むのは、教育機関の自殺だろう。ある一名の、絶対にこれ以上「日本の大学」の価値を安売りしてはならないと思わせる中国人学生の登場によって、私は「三か国語での教科書を用いての日本通史」を教えることを断念し、直後に病気をして教壇を去った〔與那覇二〇一八a〕。そのころにはすでに、留学生の卒論審査に際して代筆の疑惑が口にされ、しかし確証がないので学位を出しますといった会話が、学科の正式の会議で平然と行われる状況になっていた。

私にとって、博士論文を書き上げてから歴史研究の現場を離れるまでの七年間は、結局のところなんだったのだろうか？ 挑戦ゆえの挫折だった、などと自己賛美をしようとは思わない。それは本質的に徒勞であり、敗北であった。

* * *

それでも人生はつづく。

病気の後遺症が残るなかで、以前のように最新の研究書を読みとばすわけにはいきにくい。しかしその分、学問にこだわらず自分にとってほんとうに大事な本を、以前に接した地点に戻りながら繰り返し読むことが多くなった。いわば私は歴史を喪^{うしな}つたかわりにはじめて、自分にとつての「古典」を持つことができたように思う。

そのなかでもっとも大切な一冊に、米国のSF作家ジョン・ヴァーレイの中編「残像」がある。初出は一九七八年。アメリカ西海岸のフラワー・ムーブメントやヒッピー・コミュニティの実験が、過去のものになりつつあった時代の作品だ。

わたしは戦争というものを、まさに人が他のものたちとともに生きる一つの生活様式と考えているのだ。きみはまったく誤解しようもない言葉でもって、自分の意志を他の人々に押しつけ、その結果、相手は降参するか死ぬかきみの頭をふつとばすか三つに一つしか生き方がなくなり、このようにして、きみたちは戦争を生きるのだ。

これが、なんらかの解決になるとしても、わたしはむしろ、いつさい解決なしで生き

たいと希望する。政治だって、たいして変わりはない。これの唯一のとり柄は、ときたま暴力の代用に言葉が使えるというにすぎない。

[Waley 一九八〇…四八〇]

病気のあとに再読してこの一節を発見したとき、戦慄とともにあるなつかしさを覚えた。ここで書かれていることは、まさしく私の博士論文の主題そのものである。なんのことはない、学界の潮流に流され東アジアのなかでの日本の近代史を探究して、たどり着いたのは畢竟、^{ひっきょう}高校生のときに衝撃をうけた私にとっての古典とおなじ場所だったのだ。

「残像」は、ある廃墟の物語ともいえる。あきらかに現実の米国におけるコミュニケーション運動の蹉跌を背景として、作中世界では視覚と聴覚に恵まれなかった男女からなる城塞のなかの共同体が描かれる。「健常者」の語り手（わたし）が、そこで過ごした体験をふり返るかたちで物語は進み、幸福とも不幸ともつかない境地に到達する終幕が待っている。

——そうか。廃墟に棲むことを選ぶ人がいてもいいのだ。

東アジアで共有される歴史という棲み家は、いまや訪れる人もなく荒れ果ててゆく。そもそも歴史を生きる、過去から未来へと続く長期間の時間軸をとって現在を位置づける営み自体が忘れ去られつつある。ポストヒストリーの状況では〔F. 大澤二〇一八…二二二—二二四〕、日本史という住居ですら存続するのか、あやしいかもわからない。がらんどろとなつた遺

跡と化して、かつてはそこで生きるといふ理想に情熱が注がれた場所が、ただ亡骸なきがらのように残りつづける。

社会の全員がそのように歴史を生きるべきだ、とする「主義」(イズム)は、いまやなりたない。しかしながらそれは、趣味としてそこに暮らす道を妨げるものでもない。

歴史の進歩という考えかたを、最初に根底から疑った思想家は一九三〇年代のペンヤミンであろう。そもそも彼は一九二五年に提出した教授資格論文(ただし撤回。批評として二八年に刊行)でバロック文化の美学を論じ、「事物の世界において廃墟であるもの、それが、思考(想念)の世界におけるアレゴリーにほかならない。バロックが廃墟に傾倒するのはそのためである」と述べた。

そこには擬古典趣味の追想をはるかに超えて、アクチュアルな様式感覚が貫かれている。瓦礫がれきのなかに毀れて散らばっているものは、きわめて意味のある破片、断片である。それはバロックにおける創作の、最も高貴な素材である。……

彼らが建てた記念碑たる廃墟には、土星の動物が棲んでいる。凋落により、そしてただひとえに凋落によつてのみ、歴史上の出来事は収縮して舞台(生起・出来事の現場)のなかに入り込むのだ。

[Benjamin 一九九九:五一、五十一、五五]

土星云々の比喻をのぞけば、魔術的な文体に反して伝えたいことは明晰だと思う。すべてが調和し、ひとつの有機的な世界観のもとで意味を与えられる存在としての歴史は、古典主義の崩壊とともに終わっている。それ以降を生きる人びとにできるのは、拾いあげた断片をただ、「これはあれと似ているのではないか」という感性によってつなぎあわせ（アレゴリー）、かろうじて打ち砕かれる前の歴史の秩序を思い返すことにすぎない。

たとえばいま、あたらしいファシズムが台頭しつつあるといった過去とのアレゴリーが口にされる。しかしそれはけっして、万人に受けいれられる世界像をつくりはしない。統一された歴史観を同時代の人びと全員に共有させるような、圧倒的な「時代の精神」が存在した二十世紀が遠ざかったいま、私たちが手にとれるのは引き裂かれ断片化された、「私には歴史がこう見える」という無数の語り口の山だけである。

歴史のうえに現在の社会を位置づけて生きようとする人は、じっさいにはもうだいぶ昔から、廃墟に棲んでいたのだった。そのように考えるときはじめて、二十一世紀の初頭はこの国の歴史学がこうむった巨大な喪失と凋落の体験は、意味ある再出発の場所へと変わるのだと思う。

* * *

本書は私が歴史学者をしていたころに、拾い集めた瓦礫を積みあげた「東アジア史」のデッサンであり、いわば私なりの設計で巨大な廃墟の図面を引いてみたものだ。日中韓三か国の関係が激変していった、二〇一〇年に前後するほぼ十年の期間に書かれたものを集めている。それぞれが単独の論考として世に問われたものであるので、関心を惹く箇所から読んでいただくことができる。

あるひとりの学者がつくった廃墟によるこそ。自由に内部を散策していただいた結果、また訪れようかなと思つてくださる読者がいるなら、とても嬉しい。

【参照文献】

- 大澤聡二〇一八 「全体性への想像力について」『教養主義のリハビリテーション』筑摩選書。
大沼保昭編著二〇〇〇 『東亜の構想 21世紀東アジアの規範秩序を求めて』筑摩書房。
波多野澄雄二〇一一 『国家と歴史 戦後日本の歴史問題』中公新書。
原洋之介二〇〇二 『新東亜論』NTT出版。
與那覇潤二〇〇九 『翻訳の政治学 近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』岩波書店。
與那覇潤二〇一四 『中国化する日本 日中「文明の衝突」一千年史 増補版』文春文庫
(原著二〇一一年)。
與那覇潤二〇一八 a 『知性は死なない 平成の鬱をこえて』文藝春秋。

與那覇潤二〇一八b 「大学のなかでこれ以上統いてはならないこと」『現代思想』四六巻一
五号。

米谷匡史二〇〇六 「ポスト〈東アジア〉 新たな連帯の条件」孫歌・白永瑞・陳光興編『ポ
スト〈東アジア〉』作品社（初出二〇〇五年）。

Benjamin, Walter. 一九九九 『ドイツ悲劇の根源 下』浅井健二郎訳、ちくま学芸文庫（原著
一九二八年）。

Varley, John. 一九八〇 「残像」冬川亘訳、ジョン・ヴァーレイ『残像』ハヤカワ文庫（初出
一九七八年）。

SAMPLE

目次

まえがき——廃墟に棲む人のために……………(1)

I 西洋化のとまった世界で——同時代への提言

1	三つの時代と「日中関係」の終わり——今こそ読みなおす山本七平……………3
1	「終わりののはじまり」を見抜いた山本七平……………5
2	「進歩的知識人の蹉跌」の原型は江戸の儒者に……………6
3	東アジアに存在するのは「士大夫のナシヨナリズム」……………9
4	国家のリアリテイが欠如した中国と日本……………11
5	「韓国モデル」は未来の解決策を示せるか……………12

2	再近世化する世界？——東アジア史から見た国際社会論	14
	はじめに	14
1	リ・リオリエント——アジア時代のグローバル社会論	15
2	民族とナシヨナリズム(の違い)	20
	(1) 東アジア史の知見・想像(されただけ)の共同体——ナシヨナリズムの不在と抑制	20
	(2) 今日の含意・「新人種主義」は(そもそも)存在したか?	24
3	近代東アジアの国際的契機——朝貢外交システムと現代アジア	26
	(1) 東アジア史の知見・ヨーロッパ覇権以降——もうひとつの外交システム	26
	(2) 今日の含意・近世、未完のプロジェクト	30
4	中華(帝国)——再近世化の世界秩序と東アジア思想の可能性	33
	おわりに	40
3	中国化する公共圏？——東アジア史から見た市民社会論	49
1	西洋史からモデルを作る——アレントとハバーマス	49
2	東アジア史からモデルを作る(Ⅰ)——清朝中国	52

目次

3	東アジア史からモデルを作る(Ⅱ)——徳川日本……………	57
4	世界史を描き直す——日本化から中国化へ?……………	61
5	歴史から未来を描く——アジア市民社会像の新構築……………	64
	【補論Ⅰ】 社会の「支え方」の日中比較史	
	——陶徳民ほか編『東アジアにおける公益思想の変容——近世から近代へ』書評……………	78
1	構造……………	80
2	実践……………	83
3	考察……………	87
4	批判……………	93

II 歴史のよみがえりのために——古典にさがす普遍

4 革命と背信のあいだ——逆光のなかの内藤湖南……………101

1 中国を通じて語られる自画像……………101

2 一身にして二生を経ず……………103

3 唐宋変革・明治維新・辛亥革命——『支那論』……………105

4 漢籍の語で近代を評価する……………108

5 歴史の終わりを中国に見る——『新支那論』……………110

6 同病相憐れむアジア主義へ……………112

7 湖南研究の軌跡と現状……………114

5 史学の黙示録——『新支那論』ノート……………116

1 史論と時評——〈現在〉の視野から……………116

(1) 二〇二二年という終焉……………116

(2) 湖南の復権?……………119

目次

2	『新支那論』の呪い——〈西洋化〉パラダイムの終焉……………	124
(1)	問題としての『新支那論』……………	124
(2)	批判者たちの論理……………	127
(3)	その陥穽と今日的状況の起源……………	129
3	『支那論』からの視線——方法としての〈近世〉……………	132
(1)	〈中国的民主主義〉としての近世論……………	132
(2)	文化というニヒリズムへ……………	137
4	未来としての中国——『新支那論』のなかの〈帝国〉……………	143
(1)	国家なき社会をめぐる……………	143
(2)	資本主義なき市場経済……………	146
(3)	中国式ネオリベラリズム……………	150
(4)	アナーキカルな統治へ……………	153
(5)	国家も民族もない土地で……………	157
5	湖南の逆説——〈日本史〉の終幕へ……………	161
(1)	進歩という幻影……………	161
(2)	『新支那論』の反省……………	166

	6	変えてゆくためのことば——二十世紀体験としての網野善彦	174
	1	ことばと自由	174
	2	歴史と権力	176
	3	無縁と共産	178
	4	大陸と列島	182
	5	伝統と信念	184
	7	無縁論の空転——網野善彦はいかに誤読されたか	189
		はじめに——二人の幽霊	189
	1	「中世都市論」	195
	2	神田千里(松井輝昭・林文理)	202
	3	『無縁・公界・楽』	205
	4	永原慶二(義江彰夫)	208
	5	石井進(峰岸純夫)	212

目次

6	〈社会史〉(山口昌男)……………	215
7	安良城盛昭……………	218
8	樺山紘一……………	224
9	阿部謹也……………	229
10	中沢新一……………	233
11	岩井克人……………	238
12	小熊英二・赤坂憲雄……………	242
	おわりに——よみがえる幽霊……………	244
	【補論Ⅱ】社会科学にとって歴史とは何か	
	——久米郁男『原因を推論する——政治分析方法論のすゝめ』書評……………	251

III もういちどの共生をめざして——植民地に耳をすます

8	帝国に「近代」はあつたか——未完のポストコロニアリズムと日本思想史学……………	259
1	視界不良の時代……………	259
2	マルクスからフーコーへ？……………	261
3	山崎闇齋の逆説……………	264
4	植民地近代の陥穽……………	267
5	三島由紀夫が見た闇……………	273
9	荒れ野の六十年——植民地統治の思想とアイデンティティ再定義の様相……………	276
1	方法——「思想史」から植民地を問う……………	276
2	前提——「自覚的に曖昧な秩序」としての東アジア近世……………	278
3	発端——「十九世紀の危機」と伝統文明の失調……………	281
4	葛藤——「自覚的に曖昧な秩序」への近代文明の侵攻……………	285
5	転換——「中華世界」の再浮上と日本帝国との拮抗……………	294

6	蹉跌——「中華帝国」との最終戦争と敗北……………	300
7	総括——「中華になり損ねた帝国」の崩壊……………	308
8	回帰——「自覚的に曖昧な秩序」としての戦後東アジア……………	311
10	靖国なき「国体」は可能か——戦後言論史のなかの「小島史観」……………	321
1	「史観」が問われた季節……………	322
2	「史観」を語るのは誰か……………	324
3	「史観」の起源にせまる……………	326
4	比較史の技法としての「史観」……………	329
5	靖国という「史観」を超えて……………	331
【補論Ⅲ】	ノンフィクションに学ぶ、「中国化」した世界の生き抜き方……………	334
	あとがき——収録作品解題……………	341

【凡例】

・本書には、おおむね二〇〇六年から二〇一四年にかけて執筆された文章を集めた。初出時の書誌については、執筆の背景とあわせて巻末の「あとがき」にまとめている。再録にあたっては当時の雰囲気損なわないよう、本文の修正はなるべく控える方針とした。

・初出時の出典表記は多様なものが混在していたが、再録にあたり社会科学方式（ハーバード式）に統一した。そのため注記に関しては、かなり大きく初出の文章から動いている場合がある。なお、ほんらい文献レビュー的な性格で執筆された文章については原文にならない、紹介する書籍の書誌事項を本文中に直接記す形式のままとした。

・4章・6章・10章は文庫に寄せた解説文、補論のうち二つは学術誌に載せた書評が出典である。これらの章で本文中に記されている章数・頁数は、本書ではなく、論評の対象となっている書籍のものであることに注意されたい。

・史資料の引用が長文におよぶ際は、途中で適宜改行を施した。漢字・かなの表記は原則として原文に従ったが、一部通行の字体に改めた場合がある。

・学術論文と書評を中心とする本書の姉妹編として、同じ時期に一般向けの媒体に発表した対話や時評を集めた『歴史がおわるまえに』（亜紀書房、二〇一九年）がある。本書のテーマと共鳴するところの多い論考を取めているので、あわせて手にとってくだされば幸いである。